

「家族機能の社会化」で ひきこもりを孤立させない

～衣食住、愛情も支援する地域共生社会を～

北九州で30年以上にわたりホームレスに寄り添い、3,400人以上を自立に導いてきた奥田知志さん。現在は、認定NPO法人「抱樸」の理事長として、8050問題に代表されるような長期ひきこもりや子どもの貧困などの問題にも積極的に取り組まれています。奥田さんに、ひきこもりが原因と言われる社会問題や、これからの地域共生社会に必要なことを伺いました。

抱樸では子どもの貧困問題にも取り組まれています
が、その中で見えてきたことは何ですか。

日本の子どもの貧困率は13.9%（2015年）で、7人に1人が貧困です。子どもへの学習支援や食事の提供はもちろん大事ですが、結局は子どもの貧困は親の収入によるので、子どもだけではなく世帯を丸ごと支援しないと解決しません。そこで私たちは「子ども・家族marugotoプロジェクト」として、親の医療との連携、更生保護、再就職支援なども含めた世帯全体の支援をしています。

そこで見えてきたのは、親なのに子どもの弁当を作らない人、親なのに子どもと遊ばない人は、自分も親からこうしたことをしてもらっていないという事実です。本来なら自分の親からもらっている愛情、自立する力が引き継がれていない。「社会的相続」というものがされていないのです。いくら喉が渇いたから水が飲みたいと子どもが言っても、親が持っているコップが元から空っぽなのです。これからの地域共生社会では、そのコップに愛情という水を注ぐのは家族に限られません。「生みの親」「育ての親」「名づけ親」道行く子どもに声を掛ける地域の大人たちといった「道親」など、みんながちよとずつ注いでいけばいいのです。

法人名である「抱樸」という名前の由来は何ですか。

「抱樸」の由来は老子の「素を見し樸を抱き」という言葉です。「樸」は原木や荒木を意味します。抱樸とは、原木をそのまま抱きとめるといふ出会い方であり、人と人との関係を示しています。原木・荒木であるが故に少々扱いづらく、とげとげしい。とげに傷つき血を流しても、それでも抱いてくれる人が必要なのです。私たちは、出会いにおいて傷つくことを覚悟し、その人をその人としてありのままの姿を受け止めた上で、共に生きていくという意味も込めています。



2019年11月29日に行われた埼玉県社会福祉法人社会貢献活動推進協議会「5周年記念式典」で講話いただきました。

（今月の「福祉を考える」はお休みします。）

Profile

認定NPO法人抱樸 理事長

おくだ ともし

奥田 知志さん



1963年生まれ。関西学院大学神学部、西南学院大学神学部卒。学生時代からホームレス支援を開始。1990年に東八幡キリスト協会牧師として赴任後も継続し、2000年NPO法人「北九州ホームレス支援機構」設立。その後、認定NPO法人の認証を受け、2014年、団体名を「抱樸」に変更。社会福祉法人グリーンコープ副理事長、公益財団法人共生地域創造財団理事長、国の審議会などの役職も歴任。現在、社会福祉法人の設立に向け準備中で、寄付を募っている。著書は「もう、ひとりにさせない」（いのちのことば社）、「『助けて』と言える国へ」（茂木健一郎氏共著・集英社新書）など多数。また、2020年1月に新刊「いつか笑える日が来る」（いのちのことば社）を発行。NPOではマンスリーサポーターを募集中。詳しくはNPO法人抱樸のHPを参照。

※）オーナーに代わって、入居者へ貸し出すこと。

これからの地域共生社会には、何が求められているのでしょうか。

今までの日本は経済成長の下、企業と家族がベースになり社会保障の基盤を作っていました。そして家族が限界を迎えると、福祉制度の入口とつながっていました。でもこの30年間で企業も家族も力を失ってしまい、制度と家族の間に隙間ができてしまいました。本来なら家族の役割として普通にあったことが抜け落ち、長期ひきこもりや制度のはざまの問題が大きな課題となっていました。家族がやってきたようなことを誰がやるか。これを社会的に仕掛けていくことが家族機能を社会化することであり、これからの地域共生社会はここを目指していくのがポイントだと思います。

中高年のひきこもりが増え、80代の親が50代の長期ひきこもりの子どもの面倒をみる「8050問題」が社会問題化しています。

現在、日本には115万4千人ものひきこもりの方がいます。その周りには2倍3倍の数の家族がおり、実に多くの人がひきこもり問題に直面しています。例えば、農水省の元事務次官が息子を殺害した事件、この息子さんは長期のひきこもりでした。長期ひきこもりの問題とこの事件はもちろん直結しませんが、全くの無関係ではないと私はみています。

この事件で私が注目したのは「あの人に息子がいたことを今回の事件で初めて知った」という元同僚の言葉です。息子さんは中学生から暴れ始めたそうですから、元事務次官の父親は誰にも言えないまま何十年も過ごしてきたのでしょうか。苦しかったと思います。なぜ言えなかったかというところ「自分で何とかしろ、自分でできないなら身内が何とかしろ」という自己責任論が世間で常態化しているからです。そして彼は、他人に迷惑をかけてはいけないと、息子を殺害したのだと思います。

また、この背景には「迷惑は悪だ」という価値観があります。でも人間は互いに迷惑をかけ合うものです。全てを自己責任、身内の責任というなら、行政も国家も社会もいりません。こうした事件は家族幻想の下での悲劇であり、社会の敗北だと私は思います。

長期ひきこもりの方への支援として何が必要でしょうか。抱樸ではどのような活動をしていますか。

政府の調査によると、ひきこもりの原因は①退職②人間関係③病気④職場であり、これは自殺の原因と一緒にです。鬱状態になり、自殺になりかねない状況の中で、彼らは「安全基地」の家にひきこもることで自分の身を守り、生き延びているのです。